
共同研究の概要

上野祥史

1. 研究の目的

本共同研究は、基幹共同研究「古代列島世界の歴史像の再構築」（平成22年度～平成24年度、総括研究代表者：林部均）を構成する共同研究の一つである。近年の最新の研究成果をもとに、多角的な観点から古代列島世界像の構築を目指した基幹共同研究において、古墳時代を対象とした研究ブランチ（B班）である。

倭という表現は、漢書地理志を初出として、宋書や隋書などの中国史書や、広開土王碑文などにみえており、日本列島に対する古代東アジア世界からの呼称である。東アジアが倭と呼ぶ日本列島の世界は、弥生時代中期後半から古墳時代終末期に相当する。それは、前方後円墳という存在が象徴するように、日本列島で広く共有した規範・価値観が確立した時代であり、国家形成の歩みを進める時代とも重なりをもつ。

本研究では、倭世界を中央（王権）と地域（地域社会）の関係が規定する世界としてとらえ、日本列島的な視点と東アジア的な視点－内なる視点と外なる視点－を対照することによって、この倭世界の実態を評価することを目的とする。

求心性を志向した王権は、倭世界の周縁（九州等）や外部（朝鮮半島）との接触によって得た情報をもとに、絶えず新たな規範や価値観を創出し続けた。それは、王権が地域社会を序列化し包摂する動きに他ならない。本研究では、その規範や価値観を創出するプロセスや、如何にそれが序列化のシステムとして機能したのかに注目することによって、倭王権の実態を整理する。この実態と新羅や百済など朝鮮半島の諸王権との比較を通じて、東アジアの視点で倭王権の特質を相対化し、史書や金石文に記す王権の天下観との対照を通じて、理念と実態の交錯する倭王権の本質を相対化することが可能となる。

一方、地域社会にとっては、王権との関係は外部世界とのつながりの一つである。地域社会と朝鮮半島の各地や日本列島の他地域との関係を対照し比較することによって、王権の意図とは必ずしも重ならない地域社会の独自の動きがみえてくる。本研究では、渡来系集団を受け入れた地域等を対象として、東アジア諸地域や王権との関係に注目し、倭世界を構成する地域社会の動きを整理する。無意識に従属的な性格が強調されやすい王権との関係を、地域社会の対外交渉という視点から相対化することが可能である。それは、王権と地域社会との間に想定される「内なる境界」と、東アジア諸地域と王権・地域社会との間に想定される「外なる境界」を改めて問うことにもなる。

総じて言えば、「東アジア諸地域」「王権」「地域社会」という3つのカテゴリーの相互関係を、

王権と地域社会という二つの視座で整理し、王権と地域社会の関係によって規定される倭世界の実態を明らかにするものである。倭世界を自明のものとしてとらえるのではなく、「対外交渉」という視点そのものを相対化することも目的である。本研究では、東アジア諸地域と王権・地域社会がもっとも密接に関係をもった5世紀を中心として検討を進めるものとする。

2. 研究組織と主要分担課題

研究を推進するにあたり、「倭王権の実態」「王権の比較」「地域社会の検討」「境界の検討」という4つのテーマを設定した。「王権の比較」については、文献資料に基づいて理念と実態を比較する「王権の理念と実態の把握」と、日朝の出土資料を比較した「朝鮮半島諸王権との比較」に分けた。各テーマは相互に関連しており明確には区分できないが、研究分担者は、5つのテーマから各自が分担する主要課題を設定した。

井上 直樹	京都府立大学文学部	王権の理念と実態の把握
◎上野 祥史	本館研究部考古研究系	「王権」視点の統括・全体の総括
岸本 直文	大阪市立大学大学院文学研究科	倭王権の実態
下垣 仁志	立命館大学文学部	倭王権の実態
杉井 健	熊本大学文学部	地域社会の検討（九州）
高久 健二	専修大学文学部	境界の検討（朝鮮半島）
○高田 貫太	本館研究部考古研究系	「地域社会」視点の総括
新納 泉	岡山大学大学院社会文化科学研究科	地域社会の実態（瀬戸内）
仁藤 敦史	本館研究部歴史研究系	王権の理念と実態の把握
橋本 達也	鹿児島大学総合研究博物館	境界の検討（南方）
坂 靖	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	地域社会の実態（近畿）
広瀬和雄	本館研究部考古研究系	倭王権の実態
藤沢 敦	東北大学埋蔵文化財調査室	境界の検討（北方）
松木 武彦	岡山大学大学院社会文化科学研究科	倭王権の実態
山本 孝文	日本大学文理学部	朝鮮半島諸王権との比較
吉井 秀夫	京都大学大学院文学研究科	朝鮮半島諸王権との比較
若狭 徹	高崎市教育委員会文化財保護課	地域社会の実態（東国）

※所属は共同研究発足当初のもの

（五十音順）

3. 研究の経過

平成24年度（2012年度）

本年度は、王権の視点からの倭世界を検討することを中心に研究を進めた。

まず、規範・共通性を創出した王権が、如何に地域社会の包摂や序列化を進めたのかを整理する。国家形成論や威信財システム論や墳丘規格論などの視点から、求心性を志向した倭王権の実態を評

価することを目指した。次に、比較の視点を通じて、倭王権を相対化することを目指した。比較の一つは、政治交渉や自己表象の場において明示する王権の天下観と倭王権の実態を対比することにより、理念と実態が交錯した倭王権の本質を検討することである。もう一つの比較は、求心性の志向や地域社会の包摂や序列化という視点で、倭王権と朝鮮半島の諸王権とを比較し、東アジアにおける倭王権の位置づけを検討することである。

本年度の研究会は4回開催した。そのうちの1回は岡山県で開催し、吉備地域での遺跡・遺物検討を研究会とあわせて遂行した。

【第1回研究会】 於歴博 2012年5月12日・13日

- ・共同研究趣旨説明
- ・研究分担の確認と3年間の研究推進にかかる討議
- ・第1展示室の見学と今日的視点での検討

【第2回研究会】 於歴博 2012年9月22日・23日

- 広瀬和雄 「倭王権の特質」
- 坂 靖 「遺跡構造からみたヤマト王権—近畿地方の大型古墳群と築造基盤—」
- 橋本達也 「古墳時代の南の境界領域」

【第3回研究会】 於岡山大学 2012年10月27日・28日

- 西田和浩 「千足古墳の築造と造山古墳群」
- 高田貫太 「渡来系要素の受容と瀬戸内地域の展開」
- 高久健二 「朝鮮半島における墳墓の構造と埋葬行為」

※吉備地域の古墳群及び出土資料の検討をあわせておこなった。

古墳群調査：造山古墳・小造山古墳・千足古墳・天狗山古墳・勝負砂古墳・箭田大塚・二万大塚・作山古墳・楯築弥生墓

出土遺物検討：天狗山古墳出土資料等

[ゲストスピーカー]

西田和浩 岡山市教育委員会

【第4回研究会】 於歴博 2013年3月9日・10日

- 新納 泉 「6世紀前半の地域社会を考える」
- 下垣仁志 「古墳時代の国家形成—倭王権の構造と特質Ⅰ—」
- 井上直樹 「東アジア世界と高句麗・百濟の支配体制」

第1回研究会では、共同研究の主旨を説明し、総合展示第1室リニューアル計画の説明を行った。そして、各自がこれまでに進めてきた研究を紹介し、「王権」「地域社会」「東アジア（領域・境界）」という検討視点とのかかわりや、分担課題について意見を交え、今後の計画について議論した。以

後、3年間の研究推進にあたって、前半と後半に大きく二分し、2013年度前期までは、論点の整理と問題認識の共有をめざし、各研究会では「王権」「地域社会」「東アジア（領域・境界）」の各視点からの検討を交えた研究会をおこなうことにした。

第2回研究会では、広瀬和雄が王権という視点で、坂靖が地域社会という視点で、橋本達也が領域・境界という視点から報告をおこなった。広瀬報告では、古墳という葬制システムを共有する古墳時代社会の特質を、同質性と差異化という視点で整理し、新羅など朝鮮半島の東アジア諸地域との比較を試みた。坂報告では、古墳に論点が集約される古墳時代社会の研究を相対化すべく、集落と古墳を対置させ、古墳群の築造を地域社会経営の視点で捉えなおし、大和盆地に大古墳群が造営される背景、社会動態を推察した。橋本報告では、古墳築造地域の南限にあたる日向・大隅地域における古墳築造に注目し、土器様式や埋葬施設の視点を交えて、南九州各地及び南島世界との比較をおこない、前方後円墳を築造する世界の周縁域における各地域社会の動きを整理した。周縁領域において前方後円墳が出現する背景を、物資・情報の流通と重ねた整合的理解を提示した。

第3回研究会では、吉備地域での遺跡・遺物検討をあわせておこない、吉備あるいは瀬戸内海沿岸地域という個別事例（地域社会）を意識した議論を展開した。古墳群調査では、古墳中期を中心に地域社会動きに注目した。造山古墳を中心とする古墳群のあり方や、窯業や製鉄の生産遺跡や渡来系集落などを複合的にとらえ、地域社会の景観を立体視しようと努めた。

この視点や議論を深める方向で研究会を開催した。近年千足古墳を調査した西田和浩をゲストスピーカーに迎え、千足古墳の最新情報の提示やそれに基づく、埋葬施設の系譜や被葬者像などについて報告を受け、吉備地域を主導する集団の構成やその交流の実態について整理した。高田貫太は、こうした瀬戸内海地域の動きを、王権の視点や新羅・百済といった倭の外の視点を対照して評価し、地域社会の動きは王権の規範のみに律されないことをより鮮明に提示した。そして、高久健二は、墳墓の築造過程が儀礼の一環であることに注目し、新羅王陵を対象としてその実態について検討を試みた。この時期に東アジアの各地には厚葬墓が存在するが、形態論としての墳墓の比較ではなく、埋葬という儀礼＝行為を比較するという視座の有効性を主張した。

第4回研究会では、下垣仁志が王権という視点で、新納泉が地域社会という視点で、井上直樹が東アジアという視点から報告をおこなった。下垣報告では、倭王権の特質を探求する上で、国家あるいは王権そのものが学史の上において、如何に認識され、その議論が相互にいかなる関係にあるのかを丁寧に整理した。新納報告では、6世紀の地域社会の変動を注目しつつ、世界規模で生じた気候・環境変動を以て理解できる可能性を提示した。政治構造論の視点で王権と地域社会の関係とその変容を検討するだけでなく、気候・環境変動とそれに伴う人間社会の変質を世界的視点で比較することの重要性を提示したものとえよう。井上報告では、5世紀の東アジアの国際環境を、中国王朝による評価－官爵－の視点から比較研究を提示した。とくに、百済に対する中国王朝の官職や爵位の授与を取り上げ、近年の論点を整理するとともに、百済社会の変容と重ねてその変化を解釈しようと試みた。

平成25年度（2013年度）

本年度は、地域社会の視点に重点をおいて倭世界の検討を中心に研究を進めた。

倭世界を構成する地域社会の動きを、地域社会の対外交渉という視点から整理した。渡来系集団を受け入れた地域を意識しつつ、倭王権、あるいは日本列島の他地域、朝鮮半島諸地域との関係を、地域社会の対外交渉ととらえて検討をおこなった。

また、倭世界の周縁として位置づけられる東北北部や九州南部などを対象として、王権との距離と倭の外の世界との距離を比較し、「内なる境界」と「外なる境界」との対照をはかった。地域社会の動きを、王権の論理から解放することによって、倭世界の実態を検討することを目指した。

本年度は研究会を4回開催した。そのうちの2回は青森県と鹿児島県で開催し、前方後円墳を築造する周縁領域における遺跡・遺物検討を研究会とあわせて遂行した。

【第1回研究会】 於歴博 2013年6月1日・2日

- ・2013年度の計画説明及び検討
- ・研究発表

岸本直文 「倭王権にかかわる論点整理」

仁藤敦史 「ヤマト王権の支配構造」

山本孝文 「韓半島古代王権による墓葬制の運用—百濟の例を中心に—」

上野祥史 「古墳出土外来器物の検討視点—鏡と帯金具—」

【第2回研究会】 於歴博 2013年7月20日・21日

権宅章 「全南高興野幕古墳について」

吉井秀夫 「構築過程からみた朝鮮三国時代墳墓の比較研

若狭 徹 「上毛野における古墳時代の社会構造—前・中期を中心に—」

松木武彦 「物質文化のパターンからみた古墳時代「王権」の特質」

[ゲストスピーカー]

権宅章 大韓民国国立羅州文化財研究所

【第3回研究会】 於八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館 2013年10月11日・12日

宇部則保 「八戸周辺の古墳時代から飛鳥・奈良時代の遺跡」

藤沢 敦 「古墳時代の北方社会をいかにとらえるか」

杉井 健 「古墳時代熊本県地域における古墳と社会の動態」

※八戸地域の古墳群及び続縄文関係遺跡の出土資料の検討をあわせておこなった。

対象遺跡・遺物：阿光坊古墳群・丹後平古墳群・鹿島沢古墳群・田向冷水遺跡及び同出土資料

[ゲストスピーカー]

宇部則保 八戸市埋蔵文化財センター

【第4回研究会】 於鹿児島大学 2014年3月15日・16日

中村友昭 「古墳社会と南島域との交流—研究の現状と課題—」

橋本達也 「古墳築造周縁域における境界形成—南限社会と国家形成—」

※大隅地域の古墳群及び出土資料の検討をあわせておこなった。

対象遺跡・遺物：塚原古墳群・唐仁古墳群・岡崎古墳群・神領古墳群・横瀬古墳及び同出土資料
[ゲストスピーカー]

中村友昭 鹿児島市立ふるさと歴史資料館

第1回研究会では、岸本直文と仁藤敦史が王権という視点から、山本孝文と上野祥史が東アジアという視点から報告をおこなった。岸本報告では、古墳築造及び副葬品という考古現象に基づいて古墳時代史を概観し、記紀をはじめとする文献記録を対照することにより、歴史としての古墳時代像を描出した。仁藤報告では、文献史学の視点からヤマト王権を分節化し、外交権や支配構造、あるいは系譜という視点から、王権・国家を議論する論点を整理した。山本報告では、墓葬制度を通じて百済の王権構造及びその変遷・複雑化の過程を描出し、倭王権を相対化する視点を提示した。上野報告では、古墳時代社会が外来文物を受容する契機や価値に注目し、受容の実態の整理が、東アジアと倭との関係、倭世界を実体化させる王権と地域社会の関係を考える上で意義を有することを提示した。

第2回研究会では、権宅章と吉井秀夫が東アジアという視点で、若狭徹が地域社会という視点で、松木武彦が王権と視点で報告をおこなった。権報告では、倭系文物を保有する朝鮮半島南部の古墳について、最近の調査事例である野幕古墳の詳細な紹介をおこった。倭系文物の動きと古墳の系譜を検討することで、倭韓の相互交渉の視点で同地域の動きを評価した。吉井報告では、墳墓の築造過程という視点で、朝鮮半島と日本列島の墳墓を比較検討し、地域社会が志向した葬制から諸王権の相互交渉を相対化した。若狭報告では、上毛野地域を対象として、河川が画する地理空間における耕地（生産領域）と居住域、居館や古墳（政治機構）の関係を整理し、古墳時代地域社会のモデルを抽出した。松木報告では、王権と古墳という二つのタームを丁寧に整理し、墳墓の築造を物質文化パターンの一つとしてとらえることにより、王権の性質あるいはその変遷を議論する論点を提示した。

第3回研究会では、八戸地域での遺跡・遺物検討をあわせておこない、古墳文化と接触し一部はそれを受容しつつも前方後円墳（倭系古墳）を築造しない続縄文文化の地域社会を検討し、古墳文化の周縁領域についての議論を展開した。田向冷水遺跡を擁する古墳時代中期の八戸平野を時空比較して、その歴史地理環境を評価した。研究会では、いずれも地域社会に主眼に置いた検討を進めた。

宇部則保をゲストスピーカーに迎え、八戸周辺の古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての遺跡動態について、詳細な報告を受けた。竈や須恵器など古墳文化を受容しつつもそれが継続しない古墳時代中期の当該地域の地域社会を、遺跡の密度や古墳の築造などの視点で後続する時代と比較し、その性質についての指摘を受けた。藤沢報告では、より広域的な視点で東北全体を視野に入れ、南と北の視点を対照させて、弥生時代から古代に至る流れを概観した。古墳文化と続縄文文化の相互交渉という視点から、八戸周辺をはじめ北部東北にみえる現象を相対化した。杉井報告では、北と対置される南の動向に注目し、古墳文化の受容とその変遷を、交易ルートと生活様式という視点から検討した。地域圏内部の多様性や、生活様式の受容・伝播が地域社会の対外交流を検討する上で重要であることを提起している。

第4回研究会でも、大隅地域での遺跡・遺物検討をあわせておこない、古墳文化を直截的に導入する地域と、前方後円墳（倭系古墳）を築造しない地域に区分される、古墳文化の南の周縁領域について議論を展開した。研究会では、いずれも地域社会に主眼に置いた検討を進めた。

中村友昭をゲストスピーカーに迎え、南島域の歴史地理環境及びその遺跡動態について、土器、貝製品、葬制という視点から詳細な報告を受けた。南島文化と古墳文化との交流関係について、主に南島の視点に立ちつつ、南島産貝製品の動きを中心に古墳文化の地域間ネットワークについて議論が及んだ。橋本報告では、大隅や日向など南の古墳時代社会周縁域を、北の周縁である東北との比較や、西の周縁である対馬・朝鮮半島との比較を通じて、古墳時代の境界に対する認識を提示しようと試みた。こうした周縁像の提示を以て、古墳時代社会そのものの本質が描出できると推察している。

平成26年度（2014年度）

本年度は各年度の論点を総括し、多元的な倭世界の実態を集約することを目指した。「王権」と「地域社会」という視座を通じて得られた論点を各自の分析視点に帰納することによって、倭世界の実態を改めて評価した。

「東アジア諸地域」「王権」「地域社会」という3つのカテゴリーの相互関係を、王権と地域社会という二つの視座で整理し、王権と地域社会の関係によって規定される倭世界の実態を最終的には明らかにしようと試みた。倭世界を自明のものとしてとらえるのではなく、「対外交渉」という視点そのものの相対化を図った。

本年度は研究会を4回開催した。そのうちの1回は群馬県で開催し、地域首長の経営基盤と地域開発という視点から東国の地域社会を検討し、遺跡・遺物検討を研究会とあわせて遂行した。

【第1回研究会】 於歴博 2014年6月28日・29日

- ・2014年度の計画説明及び検討
- ・研究発表

岸本直文 「初期王権論—前方後円墳の波及とその意義—」

仁藤敦史 「神功紀外交記事の基礎的考察」

坂 靖 「遺跡構造からみたヤマト政権王権—古墳時代後期における奈良盆地の集落と古墳—」

【第2回研究会】 於歴博 2014年9月13日・14日

吉井秀夫 「朝鮮・日本における横穴系墓制受容様相の比較研究」

山本孝文 「墓制の比較による百済王権の動向」

井上直樹 「5世紀後半～6世紀初の百済と倭—文明王から東城王までの王統系譜の差異等を中心に—」

【第3回研究会】 於かみつけの里博物館 2014年11月7日・8日

杉山秀宏 「半島との関連からみた金井東裏遺跡」

若狭 徹 「上毛野における古墳時代の社会構造」

高田貫太 「5, 6世紀朝鮮半島における「倭系古墳」の造営背景」

※群馬地域の古墳群及び集落遺跡と出土資料の検討をあわせておこなった。

対象遺跡・遺物：保渡田古墳群，綿貫観音山古墳，中筋遺跡，金井遺跡群，北谷遺跡，三ツ寺
I 遺跡等及び同出土資料

[ゲストスピーカー]

杉山秀宏 群馬県埋蔵文化財調査事業団

【第4回研究会】 於歴博 2014年12月19日・20日

杉井 健 「熊本県域における集落象徴と古墳動向の関係分析に向けて」

新納 泉 「古前方後円墳の3次元計測と設計原理の復元」

松木武彦 「古墳の階層的様相とその変化—吉備南部を対象として—」

【第5回研究会】 於歴博 2015年3月7日・8日

藤沢 敦 「弥生時代後期から古墳時代の北海道・東北地方における考古学的文化の分布」

下垣仁志 「国家形成と器物保有—鏡の保有をめぐる断想—」

上野祥史 「器物の価値とその意義」

第1回研究会では、倭王権を墓制システム、歴史書の編纂過程、地域社会構造という3つの視点から検討した。岸本直文は、3世紀前半の前方後円墳に注目し、400年間維持された古墳時代の基軸たる前方後円墳共有システムが始動するプロセスを検討し、倭王権の本質について検討した。仁藤敦史は、4日本書紀の神功記の外交交渉を対象に、日本書紀と百済三書の参照関係を整理し、それぞれの編纂時期や編纂背景を論じ、史書記述の王権及びその外交関係を相対化すべきことを指摘した。坂靖は、6世紀の古墳時代後期を対象として、古墳築造や集落・生産遺跡の相互関係を検討し、大和地域の遺跡構造から、王権の所在する地域社会の実相を描写した。

第2回研究会では、主に百済地域を対象としつつ、朝鮮半島の王権の特質や構造を、墳墓築造にみる葬制や威信財の配布、王統譜という視点から検討した。吉井秀夫は、朝鮮半島や日本列島の各地域が横穴系墓制を受容するプロセスを、外来要素と在地要素の関係性で評価し、共通性や地域の独自性を抽出し、各地域音権力構造を素描した。山本孝文は、3世紀から6世紀に至る長期的視点で、百済の墓制の変遷過程を整理し、王墓と他階層の墳墓との階層関係から、画期を抽出し、その意義を社会構造の変化として評価した。ともに、墳墓の形態を直接比較した分析ではなく、墳墓を構成する諸要素の相互関係を比較検討したものとして注目できる。井上直樹は、王統が一時中断し百済王権が振るわない熊津期に注目し、日韓中の史書を対照して、外交記録を基に、その王系の位置付けを検討した。それは、外交に反映された百済王権の構造をよみとくものでもある。

第3回研究会では、群馬県域での遺跡・遺物検討をあわせておこなった。古墳築造と生産基盤の変遷が対照でき、首長と地域社会との関係が多視点で評価できる上野の地域社会を検討し、倭王権と地域首長の関係と、地域首長の権力の根源・由来を対照した検討をおこなった。

研究会では、5世紀以後に朝鮮半島からの影響を強く受けた東国上野の社会に注目し、東アジア

との関係、倭王権との関係が地域社会を新たに規定する様子を、内外の視点で評価した。杉山秀宏をゲストスピーカーに迎え、榛名火砕流に埋もれた金井東裏遺跡の調査情報を基に、集落や生産単位、墳墓などの空間構造を復元し、甲冑装着した地域首長を取り巻く地域景観を検討した。若狭徹は、具体的な動きが鮮明に追える東国上野の地域社会の、6世紀以後の動きを日本書紀や碑文などの文字資料と考古学状況を対照して描き出し、地域経営システムの実態を検討した。高田貫太は、朝鮮半島に倭系古墳を築造する歴史的意義を、在地の地域集団や在地の墓制の視点から整理した。外来墓制の受容をめぐる比較の視点は、東国上野域に多い渡来系墳墓の積石塚の相対的評価にもつながる。

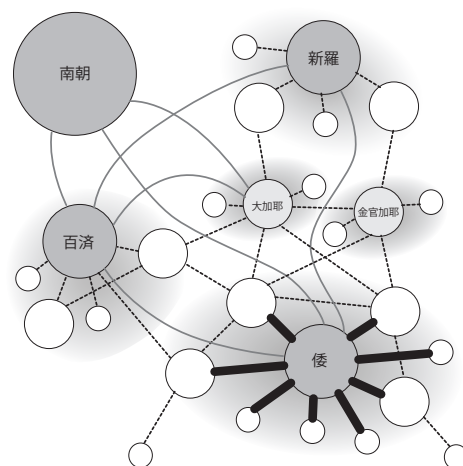
第4回研究会では、地域社会における古墳の築造を、設計原理と階層構造、集落との対比という視点から検討した。新納泉は、吉備の大型前方後円墳の3次元計測をもとに、その設計原理及び基本単位を詳細に復元し、何により前方後円墳の形態が決定するのか論じて、地域社会に古墳を築造する際の規範・基準を推察した。松木武彦は、吉備地域に注目して、小地域ごとに集落の相互関係から地域集団の階層化・構造化を検討し、古墳の築造と対比させることによって、古墳時代を通じた地域社会の動きとその画期を論じた。杉井健は、熊本県域を対象として、小地域ごとに古墳の築造と集落の存続を対比させ、弥生時代後期から古墳時代前期への動きを整理し、地域社会に有力な古墳（首長墓）が生れる背景を推察した。

第5回研究会では、倭世界と北方世界の相互作用を藤沢敦が報告し、古墳時代の器物の保有の視点から倭王権と地域社会・首長の動きを下垣仁志と上野祥史が報告した。藤沢敦は、弥生・古墳文化と続縄文文化との関係を整理し、文化接触の実態と変遷過程を丁寧に整理し、気候変動だけではない交易・生業などふくめた環境の変化の視点から評価した。下垣仁志は、地域社会における鏡の取扱いに注目し、古墳時代前期から中期を射程に、器物保有を通じた集団の編制原理を検討した。それは、国家形成論における器物授受の議論を「受」の側面で推進する試みである。上野祥史は、倭王権が東アジア由来の外来器物を選択するプロセスと、地異首長が価値を認識するプロセスに注目し、倭王権が価値を創出する状況を、東アジアと地域首長の視点から検討した。

4. 研究の成果と課題

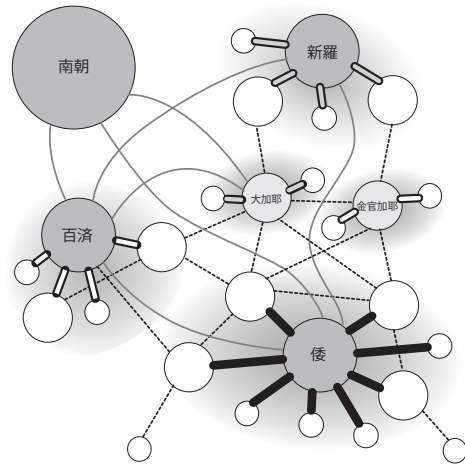
本研究では、「東アジア」「王権」「地域社会」という3つの視点で古墳時代社会を検討することを具体的な目標として掲げた。3年の研究期間を通じた議論は、「倭王権の実態」「王権の比較」「倭の地域社会」「倭世界の境界」という4つの視座に集約される。

【倭王権の実態】日本列島世界において、社会関係構築の中心的立場であり続けた倭王権の実態については、前方後円墳の築造と副葬品を中心に

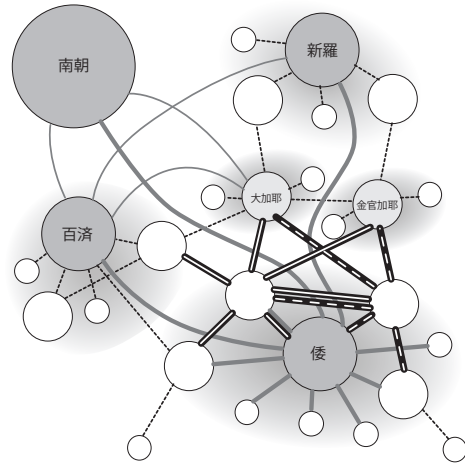


した検討を進めた。前方後円墳も器物とともに、倭王権が創出し地域社会も共有する存在であるが、倭王権が創出するプロセスと地域社会が受容するプロセスを検討対象として、構造物や器物が紐帯と序列を表象した古墳時代の権力構造を明らかにした。

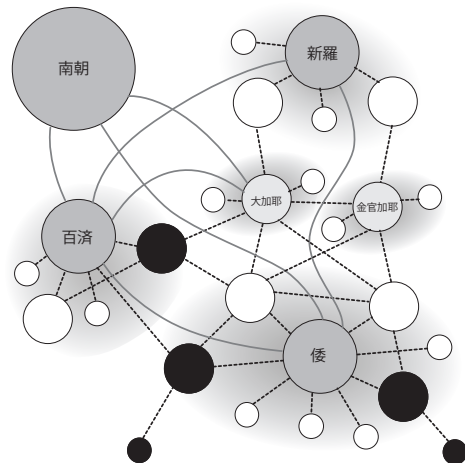
【王権の比較】 王権と地域社会の相互関係から整理した倭王権の実態を、朝鮮半島の王権や王権の理念といった他の「王権」の視点で比較した。前者では、墳墓が表象する社会の紐帯・区分原理や、墳墓形態の違いにみる行為や観念の変化を検討し、王権と地域社会の相互関係に基づいて、朝鮮半島の権力構造を明らかにした。後者では、倭と百済、新羅という特定の王権に限定してはいるが、王権と海外権力との政治交渉の実態、あるいはそれを通じた王権と地域社会の関係を検討し、王権の実態と志向した王権の理念を対比した。いずれも、倭王権の実態に対比しうる、「王権」という比較視点を提示している。



【倭の地域社会】 地域社会では、地域首長を結節点とした、地域集団と首長との「内なる」関係と地域首長と王権中枢との「外なる」関係に注目した。九州・吉備・近畿・東国の集落の動態を対象に、地域社会の二つの関係を検討し、生産基盤や交易といった実体経済の視点から、地域首長の権力の源泉について論を進めた。王権中枢の所在地である近畿も同じ視点で検討することにより、実態としての王権と地域社会の比較を実践したのである。



【倭世界の境界】 そして、前方後円墳が代表する倭系古墳を築造しない日本列島の北辺と南辺、そして倭系古墳を築造する朝鮮半島を対象に、前方後円墳を共有する現象の意義を検討した。隣接地域との関係をもとに地域動態を整理し、倭系文化の受容や倭王権の政治関与を対比した。いわば、王権間の政治交渉には該当しない「もう一つの倭の外の世界」に注目することで、王権と地域社会の関係が実体化する「倭世界」を相対評価するものであった。



【横断的議論と比較視点】 これらは、個別に議論が深化しただけではなく、相互に連携して横断的した議論が展開した。倭王権には、器物システム・儀礼システムの中心にある理念的中心としての倭王権と、大和の地域社会の動きにみる実態としての倭王権があり、両者を対照することにより、倭王権の実態そのものが多元的に描き出された。加えて、文献資料にみる、理念された王権の姿を重ねることにより、倭王権は3つの側面から相対的に評価することを可能にした。こうした多視点での王権の評価は、朝鮮半島の諸王権、とくに百済については同じ枠組みでの再構築が可能である。墳墓の築造を通してみる王権の位相と、地域間関係と連動した対外交渉の推進にみる王権の位相を対比して、百済王権を相対的に評価することも可能になるのである。

また、本研究では遺跡及び地理環境・景観の共有が、議論の前提になると考え、東国・吉備という地域社会、鹿児島大隅と青森八戸と境界領域を対象に現地調査をおこない、それを踏まえた議論を展開した。境界領域や地域社会の検討を通じて、地域社会が王権を介さずに東アジア世界とつながる事例を改めて評価し、倭の対外関係と倭の内部関係が「王権」を結節点にした別個に議論されるものではないことをも示した。倭世界についても、王権からの一方的視点ではなく、地域社会からの視点を対照することによって、相対化的な視点で描き出すことも可能となるのである。

【基幹研究での位置付】 基幹研究では、「列島世界の南と北」「国際関係」「環境」という3つを、共通テーマとして掲げている。東北北部以北（続縄文文化）や南島（貝塚後期文化）との関係、あるいは朝鮮半島南部（三国社会）との関係を提示した「倭世界の境界」の議論は、異文化と接する「境界」からその世界の本質・特質を描いたものである。朝鮮半島の王権や王権の対外交渉を検討した「王権の比較」の議論は、東アジアという「国際的」視点から倭王権を相対化する取組である。また、生産基盤や交易から権力の源泉を検討した「倭の地域社会」の議論は、地域社会という「環境」の利用という側面も併せ持つ。なお、共通テーマ以外にも、倭王権あるいは、倭世界の実態は、現象論として描き出すだけでなく、人類学的な国家形成論や権力生成論とも対照した検討も一部おこなっており、他の時空間における「王権」あるいは「権力」との比較も射程にとらえるものとなった。これは、古代社会を対象とする研究ブランチとの接点にもなりうるものである。

本研究では、多元的な検討を通じて、現状の研究水準を反映した古墳時代社会の実態を詳らかにした。そして、文化規範の共有をそれぞれの視点で改めて問い直し、社会の編制原理や紐帯原理を明らかにすることにより、古代国家の前史としての印象が強い古墳時代社会を相対的にとらえたのであり、共同研究の目的は実現し得たものと考えている。

(国立歴史民俗博物館研究部)